

サンチャゴ砦のギター^ひ弾き—フィールドノートの余白から—

重松伸司

1. 2002年3月1日、21時35分。ジョンカー通り

外気は体温を切った。だが蒸し暑い。汗が全身をしたたる。春節の名残を楽しむ家族ずれのさんざめき、物売りの声、胡弓のすすり泣き…渾然^{こんぜん}一体となって切れ切れに伝わってくる声と響き。そのチャイナタウンのはずれから、突然聞き覚えのある大音声のメロディーが、ほんの少し前まで路地を伝っていた音の断片に取って代わる。

日本語でありそうでそうでなさそうな、マレー民謡にしては勇ましく、中国民謡にしては情緒乏しく、日本民謡にしては哀しみに欠ける。なんだこりゃ？私はしばし、道端に立ちどまり耳を傾ける。数分たってやっと気がつく。そうだ、これはソーラン節¹ではないか。「ヤーレンソーラン、ソーラン、ソーラン……ハイハイ…」ここまでは聞きなれた日本語、そのあとの歌詞は意味不明、マレーシア語(バハサ・マレーシア²)であるらしい。突然私はなんだかわけのわからない錯覚に陥った。ここはしばれる函館でなし、風雪吹きすさぶ青森の海岸でない、ではここは何だ、私は今どこにいるのか、なぜここにいるのか、何が起きているのか。

翌朝、もう一度この場所に戻って確かめてみたら、International School であった。なるほど、昨夜は週末祭日の国際フェスティバルであったのか。

春節が終わったばかりの、港町マラッカのチャイナタウン、ジョンカー通りの西のはずれに私はいるのであった。

モントリオールのチャイナタウンで「シナの夜」、サンフランシスコのチャイナタウンでは「サンフランシスコのチャイナタウン」、クアラルンプールのチャイナタウンでは「夜来香^{イェライシャン}」、タイのチャイナタウンでは「熔樹下」(千昌夫「北国の春」)…私は奇妙なデジャ・ヴにとらわれる。「北国の春」が盛んに歌われた高度経済成長期のわが国はともかく、戦中の日本でも、戦前の日本でも育ったわけではない私である、だがこの「懐かしさ」と哀しみは何なのだ。

突然、まったくなんの前触れもなく、雨に煙る明治神宮外苑の学生帽の波、波、波…。それを見送る6万5千のハンカチと人の波、波、波。行進する若者を引たてようとするあの悲壮で軽薄な軍楽隊の音。1943年10月21日のデジャ・ヴ。第二次世界大戦に、今送り出されようとする「出陣学徒壮行会」³である。私が行進する学徒の一人であるのか、私は日の丸の小旗を振る壮行の一員なのか、それとも、それらを遠くから眺める私であるのか。私あるいは彼らはアジアのどこにゆき、どこへ消えていったのか。アジアとは…。

事実の集積と、整合的な—それなりに意味を持ち合うような—事柄の分析とが、フィールドワークにとっては基本的な要件であるという。そのために私は歩く。きく。出会う。資料を読む、写し取る、記憶する。だが、目的への途次途次でふと触れる音・におい・湿気・気配・雰囲気・色・ぬくもり、味覚…。それらもみな事実の一片であるならば、デジャ・ヴも、自らの記憶の深層に潜む事実であろう。しかし、それらの断片をどう記録し、表現し、どのように意味づけることが出きようか。金子光晴の「マレー蘭印紀行」⁴、ゴーギャンのタヒチ⁵に描かれた「われわれとは何か」、ナイーブな叫びを残してルソン島で「ひ

よんと消えた」竹内浩三の「愚の旗」⁶。詩人の感性も、画家の狂気もない、凡人の私が歩き、アジアの路傍で書きとめたフィールドノート。その余白は、こうした焦りにも似た脈絡のない記憶の断片で埋められている。アジアは多様だというが、それは私の心と感覚にひびきあう風の多様なこだまである。風はどこから吹いてきて、どこへ吹き去っていかうとしているのだろうか。

2. 2000年1月20日、12時。サンチャゴ砦

マラッカ中心部のサンチャゴ砦の主門をくぐると、セント・ポールの丘である。開発はそのふもとまで着々ドンドンと進んでいる。かつて15年前、始めてこの丘に登って以来数年ごとに上ってきたが、その頂きから眺める海峡はますます狭く一層黄濁している。平べったい箱を並べたような倉庫群、並び立つ小住宅、工場の平屋根。埋め立てられたかつての海峡は、それでも、微風を送ることをあきらめてはいない。ただ、熱帯モンスーン特有の潮の香りはもはやなく、ほこりっぽい土のにおいだけを吹き上げてくる。

青年はいた。教会遺跡の石柱に腰を下ろして、新聞を読んでいた。15年前にセント・ポール教会の廃墟の真ん中で、観光客の声を鋭敏に捕らえては、朗々と唄っていたエンターテイナーである。

私は少し距離を置いて彼の腰かけているそばの壁にもたれて、新聞を読み終えるのを待った。「15年前にあんたの歌をここで聞いていたんだけどね」。「それは、それは。よくおぼえてくれたね」。彼の名はスミス、35歳。西欧系ではない、インド系かマレー系か、いずれにせよわがモンゴロイド系でないことは確かである。観光客はこの暑いさなかには上ってこないようだ。問わず語りのように、彼は小声で話す。「見てみなよ、この下を。マラッカの町に車が増えて。海はごらんのように埋め立てられて。すべてが忙しく、すべてがあわただしく…」「あんた、毎日ここで歌っているの?」「そうだよ、雨の日以外は」「大変だね?」(われながら、大きなお世話とは思うが)「いや〜、イージーライフでいいよ」はじめてこの丘で歌う彼を見たときは、20歳であった。彼が独学で覚えたことばは10を超え、歌の数はそれ以上だという。

耳をいつも澄ましていること、丘のふもとから風が運んでくるかすかな観光客のことばが、何語であるかをすばやくキャッチすること、そのことばで歌われている一番ポピュラーな歌を、彼らが姿を現す前に歌い始めること、リクエストされても知らない歌は、丘の観光客から、メロディーは口伝えで歌詞はローマ字書きで覚えること、ラジオをよく聞くこと…このほかにも、生活を賭けたストリート・ミュージシャンとしての秘訣を聞いたと思う。しかし、思い出せない。彼にとって私は通りすがりの一観光客に過ぎない。営業上の秘訣を教えても商売敵にはならない。とそう思ったのか、それとも、誰かに、自負するところを聞いてもらいたかったのか。

「15年前、俺は駆け出しのエンターテイナーだった。ここで毎日歌ったもんだ。若かったし夢もあった。今俺は年をとったよ」。彼は風ではためく新聞を片手で押さえ、右手でギターを支えながら小さく語る。頭髪は薄くなっていた。ギターもそれなりの年をとっていた。

「一曲、いい歌聴かせてくれないか、マレー語で頼むよ」彼はやおらギターを取り、歌い始める。教会の墓石の上を一瞬激しく風が渦巻く。歌声よりギターの伴奏が大きく響いた。確かに15年の歳月は声量の衰えを感じさせた。私は50リングットを墓石におき、風で飛

ばされないように小石をそつとのせた。彼の写真を2枚撮り、再会と健康を祈って軽く握手をして丘をおりた。後日、私は日本から手紙をつけて彼の写真を送った。

Dear Mr. Smith,

C/O the Manager of Equatorial Hotel, Malacca.

I am happy to have met you around 12:00 on 12, January on the top of Porta de Santiago. However these 15 years I have not met you, I still remember of you on the day when you sang nice songs here to every visitor, in every language, of many good oldies music. I hope you may be well and continue your business. As I do not have your mail address and your name, I am sending this letter and photos to the manager of near-by hotel where I stayed in Malacca. I hope that the manager will certainly send these to your hand.

Sincerely,

A Japanese passer-by

3. 1985年8月10日、12時。マラッカ市内

赤道の陽光が真上からふってくる。痛い。ポルトガルの要塞、サンチャゴ砦は漆くいとレンガの姿をとどめるのみ。青銅の砲口はマラッカ海峡をにらむ。しかし、そのかなたには大海洋帝国の威信を揺るがすオランダの船隊や槍・刀で武装した裸のアラブ海賊はいない。今は10万トンという巨大石油タンカーやインゴットを積んだ貨物船に、夜半に高速で忍び寄り、ライフル銃で威嚇し略奪を行うという現代のハイテク海賊である。

砦の正門をくぐると、緩やかな小道がジグザグ状に丘上に続く。丘とはいえそれは高さ数十メートルの小山に過ぎない。墓石が小道の両側に点在する。栄光は死と表裏一体という陳腐な印象が思わず浮かんでくる。オランダ・ポルトガルその他国籍不明の墓・墓・墓…生まれたばかりの幼児、20数歳の女性、功成り名とげたと思しき人物、青年将校らしき立派な肩書き。シンガポールの北郊にある文字通りの小石に名のみをとどめるからゆきさんの墓を想起する。死は全人にひとしく降りかかるが、しかし死をとどめる痕跡はさまざまである。

丘の上には、ポルトガル人が建て、一時フランシスコ・ザビエルの遺骨が安置されていたというセント・ポール教会の廃墟が残る。ギターの弾き語りをしている色黒の青年が一人。丘を登ってくる観光客の団体が、まだ頂上に姿を見せないうちに、青年の耳は、即座に彼らが声高に話す声音を捕らえる。教会の廃墟の壁からその一団がどっと姿を見せるや、すぐさま彼らの好むらしい歌を歌いだす。フランス語圏の観光客と思えば、「おー、シャンゼリゼ」を、中国語系の一団が上ってくると、すかさず中国語の民謡を(しかし、その歌詞がマンダリンなのか、客家語なのか、それともほかの地方語なのか私には区別がつかないのだが)、日本人らしき老夫婦が姿を見せるや、「桜、桜…」、マレー系若者が来れば、今はやりのポップスをマレー語で、アメリカの観光客らしいと見れば、50年代ポップスをアメリカ語で…。観光客の話すさまざまなことばで歌いだされるメロディー・テンポ・情感、それらを瞬時に切り替えて弾き語る青年。私は、教会の壁にもたれて、小一時間ばかり次から次へと繰り出されることばとメロディーに聞きほれていた。エンターティナーとしてうまいのかどうかは知らない。ただ、客の姿が見えないうちに、マラッカ海峡から吹き上

げてくる微風に乗って漂ってくることを即座にキャッチして歌いだす、そのすばやい反応に感じ入っていた。そのそばを風が吹きぬけていった。

注：

1 「ソーラン節」。青森のニシン漁の漁師が歌い、やがて彼らと共に北海道へ伝わったといわれる漁師民謡。捕獲したニシンを運搬船(汲み船)に移すときに掛ける力づけの声「ヤーレ」とそれに呼応する「ソラソーラ」の掛け声とが合わさって生まれたという民謡。

2 「Bahasa Malaysia」。マレーシア(Malaysia)の言語 (Bahasa)。現在のマレーシア連邦の国語。マレー語を母体に、英語・アラビア語・タミル語・中国語などを取り入れたことば。インドネシア語との共通点も多い。

3 「出陣学徒壮行会」。1942年2月、シンガポールは日本軍に占領され、昭南市と名を変えた。1943年、戦況は次第に不利となる。同年10月2日、文系学生の徴兵猶予はなくなり、同10月21日、明治神宮外苑競技場で、7万人に上る人々が集まり、首相のもと学徒出陣壮行会が行われた。そして、多くの学生がアジア各地の戦場へ送り出された。

4 金子光晴「マレー蘭印紀行」

「うつり気で、長つづきしない熱情に似た豪雨が、一気にゆきすぎてしまうと、カンボンの杭のあいだの泥水の 跳梁^{ちようりやう}のなかに、太陽がぐりぐり揉みこまれ、光の屑や、どぎつい破片が、泥水のうえにちらばる」「そして、川は 放縦^{ほうしゅう}な森のまんなかを貫いて緩慢に流れている。水は、まだ原始の奥からこぼれ出しているのである。それは、濁っている。しかし、それは機械油でもない。ベンジンでもない。洗料でもない。鉱毒でもない。それは森の尿^{いばり}である。水は歎いてもいない。挽歌を唄ってもいない。それは、ふかい森のおごそかなゆるぎなき秩序でながれうごいているのだ」(『金子光晴全集 第六巻』、中央公論社、昭和51(1976)年、15-16頁。

5 ゴーギャン(1848~1903)。パリ生まれのペルー・リマ育ち、水夫・株式仲買人・画家彫刻家を経て、タヒチ島へ渡り、ここでライフワーク「わたしとはなにか、私はどこへゆくのか、わたしはなにものか」を描く。偉大なる放浪者、国際的フーテンの寅さん。

6 「五月のように」

「なんのために／ともかく 生きている／ともかく／

「どう生きるべきか／それは どえらい問題だ／それを一生考え 考えぬいてもはじまらん／考えれば 考えるほど理屈が多くなりこまる

「こまる前に 次のことばを知ると得だ／歓喜して生きよ ヴィヴェ・ジョアイユウ／理屈を云う前に ヴィヴェ・ジョアイユウ／信ずることは めでたい／真を知りたいければ信ぜよ／そこに真はいつでもある

「弱い人よ／ボクも人一倍弱い／信を忘れ／そしてかなしくなる

「信を忘れると／自分が空中にうき上がって／きわめてかなしい／信じよう

「わけなしに信じよう／わるいことをすると／自分が一番かなしくなる／だから

誰でもいいことをしたがつている／でも 弱いので／ああ 弱いので／つつい

わるいことをしてしまう／するとたまらない／まったくたまらない／自分がかawaiiそう

になって／えんえんと泣いてみるが／それもうそのような気がして／ああ 神さん／

ひとを信じよう／ひとを愛しよう／そしていいことをうんとしよう

「青空のように／五月のように／みんなが／みんな／愉快に生きよう」

(ボクの二〇回目の誕生日の日、これを、ボクのために、そして、ボクのいい友だちのためにつくる。)

「骨のうたう」

「戦死やあわれ／兵隊の死ぬるや あわれ／遠い他国で ひょんと死ぬるや／だまって

だれもいないところで／

「ひょんと死ぬるや／ふるさとの風や／こいびとの眼や／ひょんと消ゆるや／国のため／大君のため／死んでしまうや／その心や

「白い箱にて 故国をながめる／音もなく なんにもなく／帰っては来ましたが／故国の人によそよそしさや／自分の事務や女のみだしなみが大切で／骨は骨 骨を愛する人もなし／骨は骨として 勲章をもらい／高く崇められ ほまれは高し／なれど 骨はききたかった／絶大な愛情のひびきをききたかった／がらがらどンドンと事務と常識が流れ／故国は発展にいそがしかった／女は 化粧にいそがしかった／ああ 戦死やあわれ／兵隊の死ぬるや あわれ／こらえきれないさびしさや

「国のため／大君のため／死んでしまうや／その心や」

以上、『竹内浩三 愚の旗～戦死やあわれ～』〔監修〕家永三郎、小田切秀雄、鶴見俊輔、日本図書センター、1992年所収。

- 竹内浩三(1921～1945. 4. 9)。フィリッピン・ルソン島バギオの1052高地にてひょんと戦死、23歳、遺骨なし、戦死数万人の一人。

(アジア文化学科 教授)